戦後の地域スポーツの歩みから、
総合型地域スポーツクラブの誕生の意味について考える

清原泰治
（高知女子大学文化学部教授）

私が住んでいる香美市で、総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブとする）を設立する準備を始めることになった。それは良いのだが、設立準備委員会の代表は、何と、私である。これまで、学生たちと一緒に、高知市の旭東スポーツクラブや仁淀川町の清流クラブ池川の設立を応援し、ＮＰＯ法人すさきスポーツクラブの事業計画の提案などに携わってきたが、まさか、自分が総合型クラブ設立の主要メンバーになろうとは…。

困った時には、スポーツ史研究に少しでも関わった者は、歴史に学ぼうとするものである。高知県の戦後の地域スポーツがどのような歩みをしてきたのか、歴史をひもといてみたい。

高知県でのスポーツ行政の始まりは、1927（昭和 2）年である。高知県学務部社会課に体育主事が配置され、「高知県体育振興方針」と「高知県体育振興方案」が示された。しかし、戦前は、地域スポーツの普及はなかなか進まなかったようである。

「社会体育」としての地域のスポーツ活動が活性化するのは、戦後である。

本川村（現いの町）では、1946（昭和 21）年に「村民体育大会」（1963 年に「村民運動会」に改称）が開催されている。高知市でも、1948 年に「市民運動会」を実施している。さらに、大野見村（現中土佐町）でも昭和 20 年代から「村民大運動会」が開かれていた。本山町では「職域運動会」が始まった。

1950（昭和 25）年前後からバレーボールやソフトボール、卓球、バドミントン、野球、陸上競技といったスポーツが、徐々に愛好者たちの間で実施されるようになっていたようである。

1950 年代後半（昭和 30 年代）になると、学校で行われる運動会の他に、地域の運動会が県内の各地で盛んに開かれるようになった。「町民運動会」や「村民運動会」として、物部村（現香美市）、本山町、池川町（現仁淀川町）、中土佐町、西土佐村（現四万十市）、十和村（現四万十町）で地域住民が参加する運動会が始まっている。

市町村教育委員会に「社会体育」担当職員が誕生した町もある。野市町（現香南市）では、1956 年に社会教育課が地域スポーツを所管することになり、さっそく「町内マラソン大会」を開く。翌年には、「社会体育モデル地区」として県の指定を受け、ソフトボールを重点種目に選んで普及を図った。スポーツの組織化も進め、1960 年にはソフトボール、バレーボール、サッカー、柔道、剣道など 10 種目から成る野市町体育会を結成している。

スポーツ行政はまだ始まっていなかったが、野市町体育会の他にも、大宮町（現

香美市)体育会、奈半利町体育会、葉山村(現津野町)体育クラブが歩みを始め、地域のスポーツ活動を担うスポーツ組織や団体を有する町村が徐々に増えていくのもこの頃である。

1960 年代後半(昭和 40 年代)は、地域の運動会や総合体育大会、地域スポーツの組織化が一気に進む時期である。北川村、芸西村、夜須町(現香南市)、赤岡町(現香南市)、野市町、香北町(現香美市)、吾北村(現いの町)、須崎市、東津野村(現津野町)で運動会や体育祭が始まっている。また、田野町、香我美町(現香南市)、大豊町、鏡村(現高知市)、吾北村、池川町、西土佐村で体育会や体育協会が設立された。

市町村主催のスポーツ大会やスポーツ教室も県内の各市町村で大幅に増えている。中村市(現四万十市)での事業を例に見てみる。1971(昭和 46)年度に中村市では、「幡多スポーツ杯軟式野球大会」「壮年ソフトボール大会」「教育長杯野球大会」「市長杯庭球大会」「協会主催野球大会」「市民体育祭」(バレーボール、ソフトボール、卓球、庭球、剣道、柔道、弓道)、「ママさんバレー交歓試合」「新春走りぞめ大会」「読売マラソン大会」が開かれた。11 月 5 日の「市民体育祭」には 1200 名が参加しており、市民スポーツがかなり盛んになっていたことを示している。

また、同年度には「ママさんバレー教室」「卓球教室」「東山老人クラブスポーツ教室」「バレー教室」「親子水泳教室」といったスポーツ教室が実施された。行政主導で、スポーツイベントや教室が活発になっていたことがわかる。

種目別に見ると、高知県では、とりわけバレーボールとソフトボールが地域スポーツとして定着していった。例えば、大野見村では、以前からあった「婦人バレーボール大会」に加えて、1975(昭和 50)年には「ママさんバレーボール大会」が、翌年には「村議会議長杯バレーボール大会」、1979(昭和 54)年には「教育長杯男女混合バレーボール大会」、そして 1981(昭和 56)年には「ナイターリーグバレーボール大会」が始まった。背景には、バレーボール人気の高まりがあったことはもちろんだが、市町村教育委員会が実施したスポーツ教室の種目としてバレーボールが取り上げられたことも、普及の要因になっている。

高知県のスポーツ行政施策の進展も、地域スポーツの活性化に大きく影響している。1976(昭和 51)年 10 月 21 日、「県民総スポーツ推進協議会」が発足し、審議の結果「県民総スポーツ推進基本構想—県民会議を中心とした県民総スポーツ推進計画」がまとめられた。そして、翌年 3 月 20 日、「スポーツ県宣言」がなされる。

> 私たち県民みんなで、たくましい人づくりをめざし、自然に親しみ、スポーツを楽しみ、仲間づくりをすすめ、暮らしにつながる県民総スポーツ運動を展開しよう。
>
> ここに、スポーツを友として明日への限りない前進と希望に満ちた高知県を創造するため、「スポーツ県」を宣言します。

「県民総スポーツ推進基本構想」と「基本計画」も決定され、その方針に従って県のスポーツ行政も活性化する。

1978(昭和53)年度の施策を見てみたい。①「指導体制の確立と指導者養成」、②「スポーツ施設の整備と活用」、③「スポーツ活動の推進」、④「広報、調査活動」、⑤「社会体育団体の育成強化」の5つの柱のもとに、スポーツ施策は展開されていった。

具体的には、①として特別専門員派遣指導事業を実施し、専門指導者16名を委嘱して、市町村、職場等の指導者養成を行っている。1年間で1074人が受講した。また、13 市町村にスポーツ主事を派遣し、市町村スポーツ行政の指導的立場で活動させている。

②には県施設の開放事業とあわせて、「地域スポーツ振興特別対策事業」として、市町村の学校体育施設への補助事業を展開した。具体的には、市町村の学校が夜間照明施設の補強工事を行った際に経費の半分を県が負担した。地域でのスポーツ活性化の要因として、地域住民にとって身近なスポーツ施設の整備が進んだことがあげられるが、特に、1970 年代から各地で始まった学校体育施設開放事業と夜間照明施設の設置は、地域住民に地域スポーツへの参加を容易にした。

③の一つとして、「巡回スポーツ指導」を実施し、指導者を県内各地に派遣し、スポーツ教室を開いている。1年間で、延べ4414人の県民が受講している。

このように、県は指導者養成や施設の整備、スポーツ教室の開催などを積極的に行い、また、市町村にスポーツ主事を派遣して市町村スポーツ行政の進展も後押ししている。

1980 年代には、全国的なブームに乗って、高齢者を中心にゲートボール人口が増える。市町村教育委員会によって普及のための教室が開かれ、大会が盛んに開催された。

このように、全国の動向と同じように、高知県でも行政主導のもとで、地域スポーツが普及し展開していったのである。

では、総合型クラブの誕生の意味を考えてみたい。

「住民主体の地域スポーツクラブ」ということでは、高知県スポーツ史上、画期的な存在として、総合型クラブの誕生を位置づけることができるだろう。けれども、実態を見れば、多くの総合型クラブは行政主導で設立されていると言わざるを得ない。市町村行政のスポーツ担当者が、動機はさまざまだが、県教委と県体協のバックアップのもとに総合型クラブの設立に着手し、地域の主だった指導者を集めて「設立準備委員会」を組織し、アンケート調査を行って住民のニーズを調べ、あるいは意識を喚起し、総合型クラブの設立に至ったケースは少なくない。そういう見方をすれば、現在の総合型クラブは、旧来の市町村のスポーツ行政の延長線上にあると見ることも可能だろう。

では、なぜ、総合型クラブが誕生しなければならなかったのか。社会情勢の変化で、当初の文部科学省の構想とは違う方向に推移してきたと思うのだが、結果的には、市町村財政が危機に瀕し、あるいは市町村合併によって地域スポーツの行政担当者の配置が厳しくなったり減員せざるを得なったりする中で、地域のスポーツを維持するためには、どうしてもスポーツの住民自治を「復活」させなければならな

かったのではないか。やや「辛口」の見方だが、私の知る限りでは、少なくない現実だと思う。

しかし、そうであっても、総合型クラブの誕生が、地域のスポーツの担い手たちの自治意識を目覚めさせ、あるいはこれまで地域スポーツに参加するにあたって「垣根」の高かった住民のスポーツ活動への参加を容易にしていることは間違いない。そういう点で、私は総合型クラブの誕生を評価したいと思っている。行政主導で始まっても、「行政に寄りかかったまま」で終わらなければ、総合型クラブ設立の意義はあると思う。

戦後の高知県の地域スポーツを支えてきたのは、県や市町村のスポーツ行政である。しかし、その体制が維持できなくなっている現在、本当にその地域でスポーツが必要ならば、その地域の住民自らが行政との“パートナーシップ”のもとに新しい時代の地域スポーツを展開しなければならない。地域に暮らす人々が、自らの必要性に照らして、自らの力で地域のスポーツを創っていかねばならないと思っている。

そういうスタンスで、香美市の総合型クラブを立ち上げる歩みを始めようとしている。歴史に学んだキーワードは、「気軽に参加できるイベント」「スポーツ教室」「主体的組織」「新しいパートナーシップ」「自治」「健康づくり系の運動やニュースポーツ」などであろうか。

さて、2年後、どんな総合型クラブが香美市に誕生しているか、あるいは誕生してないか。みなさま、どうぞお楽しみに。……